

# 「徐霞客遊記」の基礎的研究(一)

— 読遊記札記、遊記行程等 —

薄 井 俊 二 埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：徐霞客遊記、徐弘祖、天台山、嵩山、名山遊記・浙遊日記行程

## はじめに

本稿は、明末の徐霞客が著した遊記に対し、基礎的な研究をするものである。全体を2部構成とし、第1部を読「徐霞客遊記」札記、第2部を「徐霞客遊記行程」とする。今回は、第1部は、「遊天台山日記」「遊嵩山日記」を対象とし、第2部は、遊記巻一の名山遊記と巻二の浙遊日記を対象とする。

## 凡例

- ・底本  
褚紹唐・呉王寿整理「徐霞客遊記」上海古籍出版社、1980年（上海本）
- ・共通する関連文献  
陳函輝「霞客先生墓志銘」（陳墓志）  
丁文江校訂「徐霞客遊記」商務印書館、1928年（丁文江本）  
丁文江「徐霞客年譜」…丁文江本附載（丁文江年譜）  
朱恵栄校注「徐霞客遊記校注」雲南人民出版社、1985年（朱校注）  
朱恵栄等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、1997年（朱全訳）  
黄坤注訳「新訳徐霞客遊記」三民書局、2002年（黄新訳）
- ・共通する地図類  
丁文江撰『徐霞客遊記』付図、上海商務印書館、1928年（丁本付図）  
褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地圖出版社、1991年（路線図）

## 第1部 読「徐霞客遊記」札記(一) —— 「遊天台山日記」「遊嵩岳日記」

### 序

「徐霞客遊記」の訳注作りを進めている。その一部は公刊したが、その過程で、不明なところ、考察の上で明らかになったところが出てきたので、それらを、箇条書きで記す。

### 1. 読「遊天台山日記」札記

- ・この篇の訳注を収録する書。  
徐兆奎注訳『徐霞客名山遊記選注』中国旅遊出版社、1852年（「徐名山注」）  
曹文趣・応守岩・崔富章選注『両浙遊記選』浙江古籍出版社、1987年（「両浙選」）

許尚枢・徐永恩選注『天台山遊記選注』西安地圖出版社、2004年（「許選注」）

朱復融訳注『徐霞客遊記』（中国古典名著訳注選書）広州出版社、2008年（「朱復融訳」、「初三日」以降を収録）

湯化・郭丹注評『徐霞客遊記』（歴代名著精選集）鳳凰出版社、2009年（「湯注評」）

・参照文献

明釈伝灯撰『天台山方外志』（「方外志」）

浙江省地名委員会編『浙江地名簡志』浙江人民出版社、1988年（「地名簡志」）

『中華人民共和国 地名詞典 浙江省』1988年（「地名詞典」）

・地図類

清宗源瀚等撰『浙江全省輿圖水陸道里記』輿圖総局、1894年（「全省輿図」）

陸軍参謀本部陸地測量部「五万分一圖」（「陸軍図」）

「寧海縣城」南支那五万分一圖台州四十五圖（「寧海」）

「華頂山」南支那五万分一圖台州（「華頂」）

『台州交通旅遊図一天台』山東地圖出版社、2002年（「現代図」）

・拙訳

薄井俊二「徐霞客遊記訳注稿——名山遊記篇（一）『遊天台山日記』『埼玉大学国語教育論叢』14号、2011年

## 札記

題名：遊天台山日記…卷一。遊記の文章が現存するのは、これが最も古いもの。約1900言。万曆癸丑41年（1613、霞客28歳）、3月30日から4月8日までを記す。両浙（浙江）寧海県を出発するところから始まり、4月1日に天台山に入り、8日の赤城山登頂まで。次の「遊雁宕山日記」の冒頭の記載によれば、9日に天台山を離れている。また陳墓志によれば、この前に「大士落迦山（浙江舟山群島の普陀山洛迦山、中国四大仏教聖地のひとつ）」を訪ね、その後、天台山、雁宕山の順で登り、さらに石門縉雲山（浙江縉雲県）にまわっている。丁年譜は、陳墓志に「西陵（浙江蕭山）にいる仲昭を訪ねてきた」記事をもって、「紹興から寧波を經由して洛迦山に至った」とするが、この記事は、崇禎元年もしくは3年の、福建への旅遊の際のことだと思われる。

### 1頁

1行：梁隍山…梁皇山とも。寧海県の西南にある。「地名簡志」によれば、県城の東7kmにあり、主峰は海拔768m。同書は、明『崇禎寧海県志』の、蕭梁末に陳霸先に攻められた昭明太子がこの地に逃げ込んだことがその名の由来だとする説を載せる（「許選注」も同じ）。「陸軍図・寧海」「丁本付図」には梁王山があり、その東麓に梁王廟があり、街道筋には梁王街の名が記されている。

3行：岐…分かれ道。「遊天台山日記 後」（以後「後記」）の岔路口（街）だろう。

：松門嶺…寧海県の西端にあるとうげ道。「陸軍図・華頂」「丁本付図」に松門嶺と記す。

5行：筋竹庵…筋竹嶺にあった庵なのだろう。「方外志」卷二形勝考（東門第二支）に「修竹干竿、蘭若數楹。長者福聚、納子化城。則有筋竹嶺庵之勝」とあり、当時筋竹嶺に庵があったことが分かる。

6行：筋竹嶺…寧海県と天台県との境をなすとうげ道。金竹嶺・金嶺ともいう。筋竹（越王竹）を産したのが名の由来という（徐名山注）。「方外志」卷三（嶺）に「筋竹嶺。在縣東四十六里。

與寧海分界」とある。「全省輿図」には筋竹嶺、「陸軍図・華頂」には金竹嶺、「丁本付図」には金竹山崗と記す。

：南行…「陸軍図・華頂峯」には金竹嶺を西に下ってすぐに永溪街という集落を記す。そこから西南にくだと大溪に出て、天台県城を經由して国清寺に至る道となる。永溪街から西へ進めば天封寺を經由して華頂峯に至る道となる。「全省輿図」「丁本付図」「現代図」にも永溪街の名を記す。

7行：國清…天台山仏教の中心で現存。隋の煬帝が天台大師智顛のために創建した（竣工は智顛没後）。天台県城から天台山へ入る入り口に位置し、山麓型・滞在型の寺院である。最澄や円珍などの日本僧も多く訪れた。「方外志」巻四に「在縣北一十里」とあり、同巻二（南門第一支）に「五峯環翠、宮殿俱高。雙澗奏響、和以松濤。則有國清寺之勝」とある。

8行：石梁道…石梁飛瀑へと通じる山道。「方外志」巻二形勝考（西門第二左支）に「紅塵白雲、僂凡道分。石梁捷徑、瑞氣氤氳。則有石梁道之勝」とある。

：閩門…蘇州都城の門のひとつ。蘇州、あるいは江蘇を表しているよう。ここでは天台山中から見た、下界を代表させているのであろう。

9行：彌陀庵…仏者の庵があったのだろう。「方外志」巻二形勝考（東門第二支）に「雲生足底、人行天上。誰挈我衣、空中五兩。則有彌陀庵仰天湖道中之勝」とあり、当時庵があったことが分かる。なお天台山を再訪した「後記」では湮滅していたという。後の地図では確認できない。

## 2頁

1行：天封寺…華頂峰の南にある智者大師が開いた寺院。今その名を冠した小村がある。「地名詞典」には「天封。天台県華頂郷人民政府の所在地で、人口149人」とある。「方外志」巻四（寺）に「在縣北五十里。陳大建七年、智者大師建。（略）隋開皇五年賜號靈墟道場、漢乾佑中改智者院、宋大中祥符元年改壽昌寺、治平三年改今」とあり、同巻二形勝考（東門第一支）に「水窮山盡、有地靈墟。盤石可坐、精廬可居。則有天封寺之勝」とある。「全省輿図」には天封寺、「陸軍図・華頂」「丁本付図」には天峯寺、「現代図」には天封と記す。黄新訳は智者肉親塔がある智者院とするが、それは後の真覚寺でこれとは異なる。

3行：華頂庵…未詳。徐名山注は、現在の華頂寺が元あったところに立てられていた小庵だろうという。今華頂寺があるが、かつては善興寺とも称された。「方外志」巻四（寺）に「善興寺、在縣東北六十里。舊名華頂圓覺道場。晋天福元年僧德韶建。（略）宋治平三年改今額」とあり、同巻二形勝考（西門第二支）に「萬八峯頭、寺鄰帝座。天籟梵音、六時三和。則有華頂寺之勝」とある。「全省輿図」「陸軍図・華頂」「丁本付図」「現代図」いずれも華頂寺を記す。

：太白堂…李白が読書をしたといわれ、後人が堂を立てたらしい。「全省輿図」は太白堂を、「陸軍図・華頂」「丁本付図」は太白書堂を記す。

4行：黄經洞…王羲之が白雲先生のために「黄庭經」を書写し、それを蔵していたと伝える（徐名山注）。「全省輿図」では黄金洞を記す。

6行：琪花玉樹…宝玉のように美しい花や樹木。孫綽「遊天台山賦」に「建木滅景於千尋、琪樹璀璨而垂珠」とあるなど、天台山を形容する際の常套語。

：嶺角…不詳。嶺の角の辺りか。「朱全訳」は「山脚下」と訳す。

9行：上方廣・下方廣…石梁飛瀑の周囲には方広寺という寺院があったが、上流から上方広寺・中方広寺・下方広寺の三つがあった。現在は上方広寺は焼失して存在しない。「方外志」には方広

寺としては見えず、石橋寺として、卷四（寺）に「石橋寺。在縣北五十里。舊傳五百應眞之境。又有方廣寺隱其中。宋建中靖國元年建。」とあり、同卷二形勝考（北門第二支）に「方廣觀面、伊誰能見。八萬度門、聊通1線。則有石梁橋之勝」とある。

：曇花亭…「方外志」卷十三（古蹟考）に「曇花亭、賈丞相似道建。萬曆甲辰尼性慧、募錢塘葛居士重建」とあるが不詳。「徐名山注」は、中方広寺あたりにあった施設ではないかという。

10行：斷橋…石梁より上流にあった自然の橋。「方外志」卷二に「在縣北七十里。」とあり、同卷二に「瀑瀉懸崖、石潭淙淙。奇哉誰設、玄龍之功。則有斷橋之勝」とある。

15行：仙筏橋…未詳。

### 3頁

4行：萬年寺…禅宗の寺で現存。唐代創建で榮西なども修行した古刹。「方外志」卷四に「萬年報恩寺、在縣西北六十里。唐太和七年、僧普岸建。（略）會昌中廢、大中六年號鎮國平田、梁龍德中改福田、宋雍熙二年改壽昌、建中靖國火、崇寧三年重建、號天寧萬年、紹興九年改報恩廣孝、爲光孝、今復爲萬年（略）」とあり、同卷二（西門）に「古木千章、平田數頃。中有梵宮、殆絶人境。則有萬年寺之勝」とある。

5行：藏經閣…明の万曆15年（1587年）に李太后が寄贈したという（徐名山注）。「方外志」卷四「萬年寺」に「萬曆十五年、慈仁明肅皇太后、頒賜藏經并紫方袍。僧明照弟子眞秀相繼主其事、建尊經閣并法堂禪室」とある。

6行：桐柏宮…鳴柏觀とも呼ばれる道觀で現存。王子晋の治所であったとか、呉の孫権が葛玄のために建てたなどの伝承があるが、仮託。文献上確認できるのは、唐睿宗の景雲2年（711）に、司馬承禎のために重建されたこと。天台山道教の中心。「方外志」卷四に「在縣西北25里。唐景雲二年爲司馬承禎建」とあり、同卷二（西門第一支）に「九峯迢嶢、玄宮逍遙。僊凡路隔、度以三橋。則有桐柏之勝」とある。

：瓊臺…天台山の名勝のひとつで自然物。巨大な台のような岩山。双闕岩に隣接する。

：雙闕…これも天台山中の名勝のひとつ。ふたつの巨大な岩山が闕のように並んで聳えている。「方外志」卷二に「自桐柏西北二里至元應眞人祠、取道僊人蹟、經龍潭側、凡五里、至瓊臺、轉南三里、至雙闕」とあり、同卷二（西門第一支）に「瓊臺薄漢、雙闕凌霄。其誰神司、僊者王喬。則有瓊臺雙闕之勝」とある。

7行：龍王堂…今の石梁鎮。天台山北部地域の交通の要衝。

9行：桃源…天台山西部の谷。唐代くらいまでは注目されいなかったが、のちに劉晨阮肇の遇仙説話と結びつき、桃源の名を冠せられた。

10行：寒…寒巖。天台县城の西南40kmあまりにある。寒山が籠もったところと伝える。「方外志」卷二に「寒巖山、在縣西南七十里。」とある。

：明…明巖。寒巖に隣接した山。「方外志」卷二に「明巖山、在縣西七十里」とある。

11行：歩頭…寒巖・明巖の西北麓の小鎮（徐名山注）。

13行：志…『大明一統志』を指す。

### 4頁

2行：寺…寒巖寺。「方外志」卷四に「在縣西七十里。（略）舊名崇福、梁開平元年建、蓋寒山子棲隱處、周顯德中改聖壽昭儀、（略）宋大中祥符二年改福善院、今爲寒巖寺」とある。



8行：偃身而過…偃（せまる）では意味が通じがたい。朱本等により、逼に改めるのがよい。

9行：護國寺…五代後周創建。「方外志」巻四に「在縣西北三十里十四都。舊名般若、周顯德四年（957）建。蓋僧德韶第九道場。宋大中祥符元年（1008）改今額」とある。徐霞客によれば、当時施設は湮滅していたようである。現在でも地名として残る。

10行：坪頭潭…徐名山注・朱注は、いまの平鎮だという。

12行：桃花塢…不詳。

15行：飯館…朱注や朱復融注では、これを桃花塢ととる。山中に館がたくさんあるとも思えないが、本文を読む限り、桃花塢からあちこち歩き回っているようにも見える。

## 6頁

3行：赤城…赤城山。「方外志」巻二（山）に「在縣北六里、一名燒山、又曰消山、石皆霞色、望之如雉堞、因以爲名。（略）」とあり、同巻二（南門第一支）に「赤城建標、珠林蔭蔭。誰其談諸、霞紅雲緑。則有赤城山之勝」とある。

5行：玉京洞…赤城山上にある道観。「方外志」巻三（洞）に「在赤城右脇、蓋十洞天之第六、茅司命眞君所治（略）」とある。

：金錢池…「方外志」巻三（池）に「在赤城山、相傳曇蘭憩此、誦經有神獻金錢、棄池中、故名」とある。

：洗腸井…「方外志」巻三（井）に「在赤城山、曇猷洗腸處、今井邊猶生青非、即其驗也」とある。

（「読『遊天台山日記』札記」了）

## 2. 読「遊嵩山日記」札記

### 凡例

- ・この篇の訳注を収録する書

「徐名山注」

周曉薇等訳注『徐霞客遊記選訳』巴蜀書社、1991年。修訂版、鳳凰出版、2011年（注と訳、「周選訳」）

黄坤選評『徐霞客遊記 選評』上海古籍出版社、2003年（注のみ、部分、「黄選評」）

朱樹人選訳『徐霞客遊記』崇文書局、2007年（訳のみ、「朱樹人訳」）

「朱復融訳」

「湯注評」

\*右記の内、「徐名山注」「朱全訳」「黄新譯」「黄選評」「湯注」は、嵩・華・太和の三山の遊記を収めるが、他の三点は嵩・華のみで、太和山遊記を省いている。後述するが、今回の旅行の第一の目的が太和山にあったことを徐霞客は明言している。にも関わらず、これを省いていることには、後者三点の見識の程が垣間見える。

- ・参照文献

傅梅撰「嵩書」、万曆40年刊（「嵩山文献叢刊」第1冊）

景日晷撰「説嵩」、康熙60年刊（「嵩山文献叢刊」第3冊）

席書錦撰「嵩岳游記」、光緒20年撰、民国8年刊（「嵩山文献叢刊」第4冊）

『登封名勝文物志』河南省登封県地方志編纂委員会編、1985年

『中岳嵩山』崔炎寿編著、黄河水利出版社、2000年

『登封市志』登封市地方志編纂委員会編、中州古籍出版社、2008年

『嵩山歴史建築群』鄭州市嵩山歴史建築群申報世界文化遺產委員会弁公室編著、科学出版社、2008年

『菩提達磨嵩山史蹟大観』増田亀三郎・岡田栄太郎編、菩提達磨嵩山史蹟大観刊行会、1932年  
「滎陽縣志」、明鈔本（「嘉靖滎陽県志」）

顧天挺等纂修「滎陽縣志」、康熙17年（「康熙滎陽県志」）

李煦修等纂「滎陽縣志」、乾隆12年（「乾隆滎陽県志」）

劉海芳等修「續滎陽縣志」、民國13年（「統滎陽県志」）

景綸修「密縣志」、嘉慶22年（「密県志」）

湯毓倬修「偃師縣志」、乾隆51年（「偃師県志」）

『中華人民共和國 地名詞典 河南省』商務印書館、1993年（「地名詞典」）

#### ・地図類

○陸軍參謀本部陸地測量部（五万分一図は入手できなかったため、十万分一図を参照した）

「鄭州」北支那十万分一圖（「陸軍北支図・鄭州」）1942年

「新鄭縣」北支那十万分一圖（「陸軍北支図・新鄭縣」）1935年

「登封縣」北支那十万分一圖（「陸軍北支図・登封縣」）1936年

「葛哈」北支那十万分一圖（「陸軍北支図・葛哈」）1935年

「鄭縣」河南省十万分一圖（「陸軍河南図・鄭縣」）1938年

「新鄭縣」河南省十万分一圖（「陸軍河南図・新鄭縣」）1938年

「登封縣」河南十万分一圖（陸軍河南図・登封縣）1938年

「洛陽縣」河南十万分一圖（陸軍河南図・洛陽縣）1938年

○その他の現在市販の地図

『湖南省地図冊』中国地図出版社、2004年（「現代地図・豫」）

『嵩山旅游交通図』湖南地図出版社、2001年（「現代地図・嵩山」）

○ウェブ地図

グーグルアース（GE）

百度地図（BD）

#### ・拙訳

薄井俊二「徐霞客遊記訳注稿 名山遊記篇（二）——『遊嵩山日記』」『埼玉大学国語教育論叢』15号、2012年

#### 札記

題名：遊嵩山日記…卷一。約3100言。天啓癸亥3年（1623、霞客38歳）、2月1日から25日までを記す。徐霞客の旅のうち、遊記の残るものは十回を数えるが、そのうち、旅の目的などを記した序文があるのは、四回目の福建省九鯉湖への遊、十回目の西南遊、そして五回目の本稿の遊だけである。元々湖北省の武当山を經由して四川省の峨眉山への旅を構想していたが、母親の孝行のために遠距離の行程は避け、嵩山・華山を經由して、武当山を最終目的としたことを述べる。

2月1日に家を出立。19日の河南黄宗店から記録が始まり、まず登封県の石淙を訪ね、20日に嵩山に入る。24日に嵩山を離れ、西北に進んで偃師県の大屯で泊。25日の龍門石窟参観までを記す。

この後の「遊太華山日記」「遊太华山日記」へと続く。

陳墓志では「辛酉壬戌兩歲（天啓元年と2年）」のこととするが、遊記本文とは異なる。丁年譜も天啓3年のこととする。

移動手段は不明。平地はだいたい山轎が多いようであるが、24日条に「策騎」の語が見え、そのときは騎乗だったのだろうか。

### 39頁

1行：玄岳…五行説からすれば、玄は北であり、北岳は恒山となる。諸注は、ここでは嵩山のことを言っているとするが、名山注は「元岳」であり、武当山のことだという。湯注も玄岳にはふたつあって、ひとつは北岳恒山、もうひとつが武当山で、明代には玄岳・太岳と称され、五岳の上に置かれたことから、この玄岳は武当山だとする。これに従う。武当山は、湖北省丹江口市にあり、周囲400km、主峯の天柱峯は海拔1612m。真武神人（玄武神）が得道した聖地とされ、道教の聖地であったが、明代に永楽帝が復興して宮觀を大いに調べ、山名を太华山と改めて太岳の号を与えた。嘉靖帝は更に宮觀を整備し、名を玄岳と改めて五岳の上に置いた。徐霞客のこの度の遊は、嵩山・華山・太华山を歴したものだが、一番の目標は、太华山に登ることにあつたわけである。

：襄…襄陽府。府治は今の襄陽地級市襄陽区。漢水沿いに位置する。

：郟…郟陽府。府治は今の十堰地級市郟県。ここも襄陽同様、漢水沿いに位置する。武当山はこのふたつのまちの間にある。徐霞客の住む江陰から長江を遡り、湖北省の武漢から漢水に入って遡及すると、襄陽、武当山、郟の順で訪れることになる。郟から陸路を北上すれば、華山に至る。

2行：有方之遊…『論語』里仁に「子曰、父母在、子不遠遊、遊必有方」とある。方は古注は、一定の規律とする。規律のある旅行をするとは、危険なめに遇わないよう、羽目を外さないよう、ということか。新注は「一定の方角」とし、どこに行くかが親に分かるようにする、行き場所をきちんと告げておくということか。いずれにせよ、母親が高齢で存命なので、遠くへの長期間の旅は避けるということであろう。

3行：朝宗…諸侯が天子にまみえること。太华山が明帝から尊崇されていたので、その山に登ることをかく言ったのだろう。

：太岳…諸注は東岳泰山とするが、位置があわない。徐名山注のごとく、太华山とすべきだろう。前掲「玄岳」参照。

4行：黄宗店…徐名山注は、今の「王宗店」という。「地名詞典」には、王宗店について次のようにある。滎陽県城関鎮の西南18kmにあつて、崔廟郷に属す。元は龍門鎮と言ひ、聖僧店・王宗店・王僧店などとも言つた。村落は谷沿いに南北に伸び、人口260人程度。もと集市が立っていたが、乾隆年間に洪水に遭ひ、崔廟郷に移つた。村の南に聖僧泉があつて、枯渇せず、村人の飲用水源になっている、と。「乾隆滎陽県志」には「龍門鎮 按龍門鎮、俗呼王僧店、又呼聖僧店。蓋因鎮西山畔有石佛。現半體、郷人欲見其全、隨掘隨滿、不可得觀。有泉、前出匯爲池。澇則溢出成河。旱亦盈盈不涸、足供一鎮之汲。此亦靈異之蹟也」（卷三建置）とある。また「続滎陽県志」には聖僧店が見え（卷一第七区図）、「集鎮」に「崔廟鎮 舊志爲龍門鎮。乾隆年間移此」とある（卷三建置志）。滎陽県と密県との境に位置し、かつては交通の要衝として栄えたのだろう。徐霞客がここを起点に記述を始めたことがそれを裏付けよう。のち乾隆以後、崔廟鎮にその座を譲り、僻地の寒村となつたのだろう。「陸軍北支図・登封縣」には王孫店、「陸軍河南図・新鄭縣」には王

村店とある。「現代地図・豫」・BDにも王宗店とある。「路線図」では、黄宗店を、鄭州と登封とを結ぶ直線上に置いているが、これは誤り。拙訳添付の地図では正しい位置に改めた。

：聖僧池…徐名山注は、鄭州市の西南境にあると言う。鄭州地級市の西南境であり、滎陽県に属す。前掲注引く「乾隆滎陽県志」にある「泉」の水がたまったところであろう。「続滎陽県志」にはこの水の記述は無く、もはや有名なものではなくなっていたのであろう。

5行：清泉一涵…涵は湿る、潤う。清らかな池が一筋ある様か。

：香爐山…徐名山注は、今は鄭州の西南にあるという。「地名詞典」には次のようにある。北緯34度、東経113度、密県城関鎮の西北12km、滎陽県との境にある。主峯は海拔606m。山形が香炉に似ているのでかく言う。徐霞客が登臨した、と。しかし遊記にあるように、徐霞客はこの山を遠望はしたが、登ってはいない。「密県志」には「香爐山 亦以形似。香爐山俗呼爲小頂。上有織錦洞。洞内有倒井、水嘗溢出。入洞百餘歩、仰觀、有孔如梭。俗傳神女織錦于此」(卷六山水志)とある。「陸軍河南図・新鄭縣」・BDには小頂山とある。

7行：石佛嶺…徐名山注は、今は鄭州市の西南境にあると。他の資料では確認できなかった。

8行：過密縣…密は、漢代から置かれていた県。「密県志」はそこから滎陽県へ北上するルートについて次のように言う。「(密県城関鎮からの)北路〔八里〕八里廟〔六里〕袁莊〔四里〕山神廟〔十里〕方溝〔二里〕聖僧店、抵滎陽界。距城、積三十里許」(卷五疆域志)。徐霞客はこのルートを逆に南下したものと思われる。

：天仙院…徐名山注は、今は密縣の境にあるとするが「地名詞典」には見えない。「密県志」に「天仙廟 在縣東五里。明世宗時創建」(卷七建置志)とあり、また天仙洞・滴水棚・白松についてかなりの記述を載せる。また清の李鵬鳴・沈沛の「滴水棚詩」、明の楊思聖・李攀龍らの「白松詩」を収録しており、天仙院とその松が有名であったことが分かる。「陸軍北支図・新鄭縣」「陸軍河南図・新鄭縣」にも天仙廟として見える。しかし、その後の資料には見えないことから、さびれてしまい、消滅したのではないか。

：天仙…天仙聖母碧霞元君、天仙娘娘ともいう。南の媽祖と並び、主に華北で尊崇されていた女神。東岳大帝の娘であるとか、黄帝が派遣した女仙であるなどの伝承があるが、徐霞客は、黄帝の三女としている。明代では泰山信仰と結びつき、太和山の真武神信仰(前掲注「玄岳」参照)と双壁をなしており、靈驗あらたかなお神籤は特に有名であったという。

10行：鬣…動物のたてがみ。ここでは松の葉の比喩。

#### 40頁

1行：西門…密県城の西門。ここから登封県への道のりについて「密県志」には「西南路〔八里〕石寨溝〔三里〕偏橋崗〔九里〕平陌集〔三里〕界河、抵登封界。距城、積二十三里許」とある(卷五疆域志)。現在のルートもほぼこれをなぞるが、徐霞客もこの道を通ったのであろう。

2行：耿店…徐名山注は、密縣の西南、登封の東北にあるとし、朱全訳は、今の盧店であるという。

5行：盤伏土積中…積は、砂利、堆積物。土や砂利などが堆積していて、その間を河川が流れており、岩や岩盤が露出していない様をいうと解した。

9行：竟水之過…徐名山注は「竟水」で切り、最高水位、と取る。湯注は、竟を最後まで(はかり)終える、と取り、川の流域の幅とする。つまり、「揆崖之隔」はある地点での川幅(直線距離)であるが、「竟水之過」は蛇行する流れの両端の最も幅の広いところをいうのだとする。一応、湯注に従って訳した。



10行：黄茅白葦…ごく普通の水辺のことか。

11行：測景臺…周公が洛陽建都の際に、時間と距離を測るのに立てたと伝える。今は台はなく、そのことを記した石碑が立つのみ。ただ、その近くには、元代の郭守敬らが建てた、観星台という天文施設が残る。

：岳廟…中岳嵩山を祭る中岳廟。創建は漢の武帝に遡るとされ、歴代皇室により尊崇され続けた。現存するものは清代の修築を経ているが、五岳の廟として古代からの形をほぼ原型通り留める。ここを中心とした嵩山の建築群は、2010年に、世界遺産に登録された。登録名は「天地之中」。

14行：武彝之水簾…武彝は武夷山。福建省の名山。水簾洞は「山中最勝之境」と称される名勝。数十mのドーム型の洞窟をなし、頂上から泉水が降り注いでいる。

#### 41頁

1行：梵音…盧巖寺の僧侶の名前だと思われるが、不詳。

2行：東…中岳廟は太室山の東端にある。よってここは「東から」と解した。

：天地之中…五岳の中心の中岳ゆえ、世界の中心となる。前述の通り、世界遺産の登録名もこれである。

5行：嵩呼之異…元封元年（前110）の嵩山祭祀の際、武帝に随行した臣下達が、どこからともなく「万歳」の声を聞いたという。これを奇瑞と見た武帝は、嵩山への尊崇をより高くし、嵩山の南麓に、神を祀るための、300戸の邑を創設した。これが嵩高邑というまちで、のちの登封市である。

：鐵梁橋…後出するが、中腹に聳える一対の岩。峡谷をはさんで両側から石板が斜めに突き出しているという。

：避暑寨…不詳。

7行：黄蓋峯…太室三十六峯の一。最も東端にある。海拔880mの小山。

：碑石…中岳廟には、百を超える石碑が現存するが、北魏時代のものと思われる「中岳嵩高靈廟之碑」には徐霞客は言及していない。

：遼…徐名山注は、金元の誤りではないかという。徐霞客が書に興味がないわけではないが、中岳廟における石碑の叙述は実にそっけない。

8行：萬歳峯…太室三十六峯の一。海拔998m。漢の武帝が訪れたとき、この峯のあたりから「万歳」の声が聞こえたことにちなむ命名だという。

12行：天門…嵩門ともいう。桂輪峯の頂に聳える岩が、半円形で欠けており、門のように見える。仲秋のころ、山麓の法王寺からここを眺めると、満月がそこから登り、あたかも玉鏡を嵌めたかのように見える。そこから中岳八景の第一として「嵩門待月」がある。宋之間に「天門歌」がある。

13行：登高巖…高登崖・棲静崖ともいう。巨大な岩のかたまりで、南側の崖に洞窟がある。

14行：廻藏映帶…徐名山注によれば、曲がり、隠し、映え合う。今ひとつよく分からない。

：洞…「説嵩」では石室といい、「登封市志」では嵩山洞・二仙洞という。

#### 42頁

1行：乳泉…「説嵩」にあり、巖の上に水が浸みだしているという。

：丹竈…「説嵩」に丹竈盆とあり、乳泉の水がたまつた窪み。

：石榻…不詳。

3行：白鶴觀址…「説嵩」によれば、周代の神仙李八百が煉薬していたところ白鶴が集まってき

たことからの命名、また浮丘伯が王子晋とこもり白鶴に乗って昇仙したことにちなむともいう。

4行：眞武廟…真武君を祀る廟。「嵩書」に玄帝廟があり、玄亀峯の上にあつて、天池・玉井があるという。

：御井…不詳。「嵩書」「説嵩」の玉井か。

：宋眞宗…北宋三代皇帝、趙垣（968～1022、即位997）。大中祥符元年（1008）、泰山で封禪を行っている。

5行：懸溜…一般には、小さな瀧や軒先からのほとぼしりのような小規模な急な流れ。湯注はこれに従う。「西の谷の小さな溪流沿いに下る」の訳となろう。徐名山注は「高い所から滑り降りる」ことと言ひ、朱全訳もこれに従う。本稿もこれに従う。

8行：不能行…進むことができないでは意味が通じがたい。自分の意のままには進めない、ということか。

9行：無極洞…「嵩書」に象極洞・鶏卵洞・老君洞、「説嵩」には鶏卵洞の名を伝え、今は老母洞・無極洞ともいう。唐代に潘師正が穿つたと伝える。

10行：法皇寺…法王寺。漢の明帝時代の創建と伝える古刹だが、おそらく仮託。北魏には存した。

：金蓮花…黄金の色をした蓮華なのであろうか。

：榻…長椅子。借榻で、一休みさせてもらうこと。

13行：嵩陽宮廢址…現在嵩陽書院があるところ。ここは北魏太和8年（484）に嵩陽寺が創建される。「洛陽伽藍記」巻五末に「嵩高中有間居寺・棲禪寺・嵩陽寺・道場寺。上有中頂」とある。隋大業8年（612）には嵩陽觀という名の道教施設に変わり、唐高宗の弘道元年（683）には皇帝の行宮ともなっている。五代期には講学の場ともなり、後唐顯徳2年（955）には、太乙書院と命名された。宋至道3年（997）には太室書院の額を賜与され、景祐2年（1035）に嵩陽書院の名を賜った。宋代には、後述の二程子ほか、司馬光や朱子なども講学し、睢陽書院・岳麓書院・白鹿洞書院とともに、四大書院に数えられるほど栄えた。しかし金代に入ると書院は廃され、嵩陽宮という道教施設に変わったが、それもやがて廃れた。明嘉靖7年（1528）に、知県侯泰が柏（後述）のあたりに嵩陽書院と二程祠を再建したが、それも明末には破壊された（明代に嵩陽書院が再建された場所と、五代から金代まで書院があった場所とについては、同じ所とする資料と、異なるとする資料とがある）。徐霞客が訪れたのは、この段階なので、三本の將軍柏と石碑が残るのみ。清康熙年間に再建され、書院としての機能も復活、「嵩岳廟志」「（康熙）登封県志」「説嵩」撰述に関わった景日珍もここで学んでいる。

：三將軍柏…漢の武帝がそのすばらしさに感嘆し、將軍に任じたという伝説がある。最も小さいものは、清康熙年間に焼失し、今残るのは二株のみだが、徐霞客訪問時は三株揃っていた。

14行：舊殿石柱…「嵩書」や「嵩岳遊記」に「石幢（はた）」とあるのがこれか。「名勝文物志」などによれば、八角柱で高さ3mあり、もともと4本あったことから房舎の遺蹟であり、唐代に韓愈らがここを訪れたことが、宋歐陽脩の撰文で記されていたという。しかし文化大革命中に、唯一残っていた1本も破壊され、現在は存在しない。

15行：范陽祖無擇…祖無擇は上蔡の人（河南省）、字は擇之。熙寧年間（1068～1077）に任官した記録がある。著に「龍学文集」（「四庫全書」所収）がある。「宋史」巻331本伝。徐霞客が出身地を范陽（河北省）としていることについて、「徐名山注」は、范陽が原籍であったが、そこが遼の支配下であったため、後に「上蔡の人」と称されるようになったのではないかと推測する。

上谷寇武仲…不詳。上谷は河北省。「徐名山注」は、熙寧6年（1073）に祖無擇と寇武仲が

嵩山を訪れたとする。

：蘇才翁…北宋、銅山（四川省）の人、名は舜元。才翁は字。「宋史」巻442文苑伝に本伝がある蘇舜欽（1040頃出世）の兄。弟の伝の末尾に数文の記載がある。

：雄碑…現存する唐碑の「大唐嵩陽觀紀聖徳感応之碑」だろう。高さ9 m、幅2 m、厚さが1 mある。実際の撰文は李林甫（?～752）で、天宝3年（744）2月5日の建立。玄宗皇帝が不老長生の術を求めたことなどを記す。

#### 43頁

1行：唐碑…前掲の「雄碑」と同じことだろう。

：裴迥撰文…「徐名山注」によれば、裴迥も玄宗朝の人で、撰文ではなく題辭を揮毫したのみという。

：崇福宮…漢元封元年（前110）に武帝が嵩山に登った際、万歳の声が聞こえたという。その山が万歳峯であり、山麓に万歳觀を作らせたのが始まり。その後太乙祠が作られ、唐高宗の時に太乙觀と名を変える。宋真宗朝（998～1022年）に崇福宮となり、宗教施設や娯楽施設が重建され、栄えた。金の侵入で破壊されるが元代に復元。元末に再び灰燼に帰するが明代に入って三度復興する。しかし明末には凋落し、遂に復元されなかった。徐霞客が訪れた時にはすでに建築物は存在していない。

2行：提點…宋代に置かれた点検調査する官職。訴訟や刑獄を掌る提點刑獄があるが、道觀を点検する提點宮觀もあり、初めは名士が務めた。のち士人が務める閑職となり、名儒たちの一時的な隠遁職として、そこが伝教の場ともなった。崇福宮の提點を務めたものに、范仲淹・司馬光・二程子などがおり、南宋時代はこの地は遼・金の支配下にあったのだが、朱子も任官している。

：啓母石…10m四方の巨岩で、塊がひとつ剥落している。「漢書」顔師古注引く「淮南子」によれば、禹が治水事業のために熊に変身していたところ、妻の涂山氏がそれを見てしまい、獣に嫁いだことを恥じて嵩山の麓で石になってしまった。丁度妊娠していたため、禹が「子どもを返せ」と呼んだところ、岩が割れて息子の啓が生まれたという。

3行：宋元碑…登封市でまとまった碑があるのは、少林寺・中岳廟・嵩陽書院。中岳廟では、北魏碑のほか、宋開宝6年（973）の「新修嵩岳中天王廟碑」や元後至元6年（1340）の「聖旨碑」などが残る。

：會善寺…北魏孝文帝の時（471～499）に離宮が建てられたのが始まり。北魏の滅亡後寺院となり、隋開皇中（581～600）に會善寺の名を賜る。唐代にも皇室から尊崇され、則天武后は嵩山に幸すれば會善寺を訪れ、住持の道安禪師を国師とあがめ、老安国師の名を与えた。寺は安国寺の名を賜る。禪宗系の高僧がここを拠点として活躍し、天文学家としても高名な一行もここで修行し、瑠璃戒壇を設けた。封禪寺とも呼ばれた。後梁代に破壊されたが、宋の太祖が復元、嵩岳瑠璃戒壇大会善寺の名を賜る。金元代に改修されたが、明末には衰亡したという。徐霞客は廃れているとは言っていない。清代に復興され、現在も元代建立の大雄殿などが残る。

4行：茶榜…石碑だろうが、「説嵩」にしか記録がない。それによれば、元僧学士李溥光の書で、峻極寺に移されているという。徐霞客が「元刻」とするのと符合する。現存するかは不明。

：戒壇記…勅戒壇碑。代宗大曆2年（767）に立てられたもので、裏面には徳宗貞元11年（795）陸長源撰文の「戒壇記」が彫られている。「全唐文」巻501所収。

：汝州刺史陸長源…呉県の人。文学に長じる。汝州刺史ほか地方官を歴任したが、部下の反

乱の中で殺された。「唐書」巻151本伝。

5行：河南陸郢…不詳。

6行：瑞光上人…不詳。

7行：正殿…いわゆる大雄宝殿か。金の大定9年(1169)の創建と伝える。明清代に重修されたが、民国17年(1928)に焼失。長らく放置されていたが、1984年に至って再建された。

：南寨…今は御寨という。金の宣宗がかつてここに軍をしいたことから「寨」の名がついたという。頂部分はやや平坦な地形で、そこへ至るには險要の地を通らなければならず「一夫当関、万夫莫開」と称された。

8行：九鼎蓮花…少室山の頂が九つに裂けていることの表現。

：九乳峯…九つの乳房のような突起が並んでいることをいうか。少室山の北側の諸峯をいうのだろう。現在五乳峯と称される山があるが、そこは少室山から少林寺をはさんだ北側にあたる。

11行：或以爲…ここでは自問自答と取った。諸注は、実際に誰か他人にこう言われたと取るが、それでは不自然であろう。

12行：工於掩映…工は巧み、優れているでよかろう。徐霞客「游黄山日記」に「宛轉隨溪，群峰環聳，木石掩映」とあり、「漢語大詞典」は「遮映襯托(隠したり被ったりして、互いに相手映えさせる)」と訳す。少室山自らが映えることに巧みである、と解した。

13行：二祖庵…禅宗二祖の慧可にちなむ建築物。慧可は少林寺で6年間達磨に学んだと伝えられる。庵は少林寺から西南に4kmの鉢盂峯上に位置し、明代の創建。

14行：珠簾…嵩山二十景に「珠簾飛瀑」がある。少室山の北、二祖庵の南に、数十メートルもの崖があり、そこから一筋の滝が流れ落ちているという。

15行：煉丹臺…煉魔台か。二祖庵の南にある四角い岩。慧可が達磨に入門を請うたとき、自らの左腕を切断して、修行への覚悟を示したという。養臂台、経行処、覓心台などの異称がある。

：小有天…不詳。

#### 44頁

5行：摘星臺…「嵩書」に摘星巖があり、「在少室之東、挺出雲表、壁直如岑樓之状」とある。

9行：爲引龍潭道…うまく読めない。拙訳では仮訳をした。

14行：甘露台…寺の西にある自然の岩。「少林寺誌」によれば、北魏の時代にインド僧の跋陀がここで仏典を漢訳していたところ、天より甘露が降ってきたのでかく名付けた、という。明代に寺院が造られ、今一部が残るといふ。

：初祖庵…北宋時代に達磨大師を記念して造られた。

：五乳峯…少室山の北麓にあり、五つの峯が聳えていることからの命名。

：初祖洞…達磨面壁九年を行つたと伝える洞。達磨洞ともいふ。

#### 46頁

1行：達磨影石…達磨の姿が、映つたといふ。

2行：夾墀二松…少林寺にも同じ表現があつた。少林寺のものとの比較でこの表現をしているので、これは初祖庵の松を指しているはずである。墀を夾んで2本の松を植えるのは、定式なのだろうか。

3行：藏經殿…いまの藏経閣だろう。法堂、講堂ともいふ。典籍や仏具を保管し、また高僧による説法講学が行われた。元代の創建。民国17年(1928)に罹災し焼失。1992年に再建された。



- 4行：千仏殿…毘盧閣ともいう。様々な仏像が安置されている。明万暦年間の創建。  
：輓轅嶺…登封から西北の偃師県との境をなす。中岳八景に「輓轅早行」がある。  
：大屯…偃師県内の小鎮。登封から洛陽へ至るルート上に位置する。

5行：伊闕…伊水ぞいの闕のような山。今の龍門山。

(以上「読『遊嵩山日記』札記」了)

## 第2部 徐霞客遊記全行程（一）——卷一 名山遊記

### 序

「徐霞客遊記」の全体像を明らかにするために、記述に沿って、どの場所を通り、訪れているかを調べる。

### 凡例

- ・行程で、徐霞客が通った場所を、遊記をもとに日を追って確認する。
- ・遊記に記録のない行程についての、先行研究の説などを〈補注〉で掲げた。その際、稿者の推測を、[ ] で挿入した。
- ・経由地で、徐霞客が経由した府県を確認する。明代の府県で示し、( ) で現代(2014年)の地方行政組織名を記す。
- ・探訪先で、山岳などの主な探訪対象を記す。( ) で別称や別表記を示す。
- ・調査の底本は、「上海本」とする。
- ・「上海本」の遊記の小見出しを踏襲したが、卷一については、便宜上通し番号をつけた。

### 卷一上

#### 1. 「遊天台山日記〔浙江台州府〕」

：万暦癸丑41年(1613)3月晦日～4月9日、徐霞客28歳

#### 行程

##### 3月

30日 陸行。浙江省台州府寧海県城を出発。  
同県域の梁隍山に泊。

##### 4月

1日 筋竹嶺を越え、天台県域に入る。  
同県域の天台山に入る。天台山探訪(～8日)。

##### 8日

(遊記ここまで)

#### 経由地

浙江省台州府寧海県(浙江省寧波地級市寧海県)  
同 天台県(同 台州地級市天台県)

#### 探訪先

天台山

## 2. 「遊雁宕山日記〔浙江温州府〕」

：万曆癸丑41年（1613）4月10日～15日、徐霞客28歳

行程

4月

9日 陸行。天台県の天台山を離れる。

10日 浙江省台州府黄巖県域に入る。

11日 温州府楽清県域に入る。

同県域の雁宕山に入る。雁宕山探訪（～15日）。

15日 楽清県城へ向かう。

（遊記ここまで）

經由地

浙江省台州府天台県（浙江省台州地級市天台県）

同 黄巖県（同 轄区黄巖区）

浙江省温州府楽清県（同 温州地級市楽清市）

探訪先

雁宕山（雁蕩山）

## 3. 「遊白岳山日記〔徽州府〕」

：万曆44丙辰年（1616）1月26日～2月1日、徐霞客31歳

行程

1月

26日 陸行。南直隸徽州府休寧県城を出発。

同県域の白岳山に入る。探訪（～2月1日）。

2月

1日

（遊記ここまで）

經由地

南直隸徽州府休寧県（安徽省黄山地級市休寧県）

探訪先

白岳山（齊雲山）

## 4. 「遊黄山日記〔徽州府〕」

：万曆丙辰44年（1616）2月2日～11日、徐霞客31歳

行程

2月

2日 陸行。白岳山を下る。

徽州府休寧県域の高橋に泊。

3日 徽州府歙県域に入る。

歙県域の湯口鎮を経由して同県域の黄山に入る。黄山探訪（～11日）。

黄山は、徽州府歙県と寧国府太平県にまたがるので、太平県域にも足を踏み入れている。

るだろう。

11日 黄山を下り、元の道を引き返して、湯口鎮へ。

歙地域の芳村を經由して、東潭で泊。

(遊記ここまで)

經由地

南直隸徽州府休寧県 (安徽省黄山地級市休寧県)

同 歙県 ( 同 歙県、同黄山市轄区)

同 寧国府太平県 ( 同 轄区)

探訪先

黄山

## 5. 「遊武彝山日記〔福建建寧府崇安県〕」

: 万曆丙辰44年 (1616) 2月21日～23日、徐霞客31歳

行程

2月

21日 陸行。福建省建寧府崇安県城を出発。

同県域の武夷山に入る。武夷山探訪 (～23日)。

23日 武夷山を出て、崇安県城に返る。

(遊記ここまで)

〈補注〉

2月1日に黄山を下山し、21日に崇安に至るまでの行程は不明。

「路線図」は、[おそらく歙県城まで戻り、そこから船に乗って] 新安江を下り、[建徳県で船を乗り換えて、蘭溪を溯り] 蘭溪県を經由して、[信安江を遡り、常山県で上陸し、江西に入り、上饒県・鉛山県を經由して] 江西と福建の境である分水関を通過して、崇安県に至ったものだろう、とする [蘭溪から江西に入るルートは、浙遊日記と同じ経路]。

經由地

福建省建寧府崇安県 (福建省南平地級市武夷山市)

探訪先

武彝山 (武夷山)

## 6. 「遊廬山日記〔江西九江府〕」

: 万曆戊午46年 (1618) 8月18日～23日、徐霞客33歳

行程

8月

18日 舟行。江西省九江府徳化県に至り、船を代えて龍開河を溯る。

李裁縫堰で上陸し、以後陸行。廬山の麓の西林寺を経て、東林寺に泊。

19日 同県域の廬山に入る。廬山探訪 (～23日)。

廬山は九江府徳化県と南康府星子県にまたがるので、星子県域にも足を踏み入れているだろう。。

23日 廬山を離れる。

(遊記ここまで)

〈補注〉

[自宅の江陰から長江を溯って、九江に至ったのであろう。]

經由地

江西省九江府德化県 (江西省九江地級市轄区)

同 南康府星子県 ( 同 星子県)

探訪先

廬山

## 7. 「遊黄山日記〔後〕」

: 万曆戊午46年 (1618) 9月3日～6日、徐霞客33歳

行程

9月

3日 陸行。南直隸徽州府休寧県の白岳山を下り、江村(?)に泊。

4日 徽州府歙県域の湯口鎮を經由して、同県域の黄山に入る。黄山探訪(～6日)。

6日 黄山を下り、東北の寧国府太平県に向かう。

(遊記ここまで)

〈補注〉

8月23日に廬山を下り、9月3日に白岳山に至るまでの行程は不明。

丁文江年譜は、鄱陽湖を渡って、[饒州府鄱陽県から昌江を遡り、]浮梁県を經由して、南直隸徽州府祁門県で上陸して、白岳山に至ったのではないかとする。

經由地

南直隸徽州府歙県 (安徽省黄山地級市歙県、同黄山市轄区)

同 寧国府太平県 ( 轄区)

探訪先

黄山

## 8. 「遊九鯉湖日記〔福建興化府仙遊県〕」

: 万曆庚申46年 (1620) 5月6日～6月11日、徐霞客35歳

行程

5月

6日 (午節後の一日) 江陰の家から出発。

23日 陸行。浙江衢州府江山県域の青湖鎮を經由して、同県域の江郎山に至る。  
江郎山探訪(同日)。

6月

7日 福建興化府莆田県域に至り、泊。

8日 莆田県域を出て、同仙遊県域に入る。

同県域の九鯉湖の祠に泊。

9日 九漈(滝)を探訪。引き返し始める。

10日 莆田県域を経て、福州府福清県域に入る。



11日 同県域の石竹山を探訪し、帰途につく。

(遊記ここまで)

〈補注〉

5月6日に家を出てから、23日に江山に至るまでの行程は不明。

丁年譜は、[杭州を經由して] 钱塘江を溯り、浙江衢州府江山県に至ったのであろうとする [浙遊日記と同じ経路]。

また、5月23日に江郎山を訪ねてから、6月7日に興化府莆田に至るまでの行程も不明。

丁年譜は、仙霞嶺を越えて、福建に入ったのだらうとする。

[福建での行程は、おそらく南浦溪を延平府南平まで下り、閩江を福州まで下り、陸路で莆田に行ったのだらう。]

經由地

浙江省衢州府江山県 (浙江省衢州地級市江山市)

福建省建興化府莆田県 (福建省莆田地級市轄区)

同 仙遊県 ( 同 仙遊県)

同 福州府福清県 ( 同 福州地級市福清市)

探訪先

江郎山、九鯉湖、石竹山

卷一下

## 9. 「遊嵩山日記〔河南河南府登封県〕」

: 天啓癸亥3年(1623)2月1日~25日、徐霞客38歳

行程

2月

1日 江陰の家から出発。

19日 陸行。河南省開封府滎陽県の黄宗店に至る。

同密県域に入り、天仙院を探訪。

引き返して密県域を通り過ぎ、河南府登封県域に入り、耿店に泊。

20日 石淙会飲を経て、嵩山に入る。嵩山探訪(~24日)。

24日 嵩山を下り、西へ向かい、偃師県域に入り、大屯に泊。

25日 洛陽県域に入り、伊闕の龍門石窟を見学、そのまま泊。

(遊記ここまで)

〈補注〉

2月1日に家を出てから、19日に鄭州の黄宗店に着くまでの行程は不明。

丁文江年譜は、陸路で徐州府徐州と河南開封府開封を經由したのだらうとする。

[あるいは、大運河を北上し、南流していた黄河に入り、開封に達したのかもしれない。]

經由地

河南省開封府滎陽県 (河南省鄭州地級市滎陽市)

同 密県 ( 同 新密市)

同 河南府登封県 ( 同 登封市)

同 偃師県 ( 同 洛陽地級市偃師市)  
同 洛陽県 ( 同 轄区)

訪問先

嵩山 (中岳)

#### 10. 「遊太華山日記〔陝西西安府華陰県〕」

: 天啓癸亥3年(1623)2月30日～3月10日、徐霞客38歳

行程

2月

30日 陸行。陝西省西安府華陰県の潼関に至る。  
同県域の華鎮にある西岳廟に泊。

3月

- 1日 華山に入る。華山探訪(～3日)。
- 3日 西岳廟に下り、華陰県城を通過し、木柸鎮に泊。
- 4日 西安府洛南県域に入り、楊氏城に泊。
- 5日 洛南県域の、石門鎮、田家原、景村鎮、草樹溝を經由し、山家に泊。
- 6日 商州県域に入る。峪口(?)に泊。
- 7日 商州県龍駒寨(今の丹鳳県城)に至り、泊。船を雇う。
- 8日 ここから船。丹水を下る。  
小影石灘に泊。
- 9日 龍関(今の竹林関鎮)を通過。  
商南県域に入り、崖の下で泊。
- 10日 蓮灘、百姓灘などを通過し、河南省南陽府淅川県域に入る。  
石廟湾(今も同名)で上陸して、泊。

(遊記ここまで)

〈補注〉

2月25日に龍門石窟に至った後、30日に潼関に至るまでの行程は不明。

經由地

陝西省西安府華陰県 (陝西省渭南地級市潼関県、同華陰市)  
同 洛南県 ( 同 商洛地級市洛南県)  
同 商州県 ( 同 丹鳳県)  
同 商南県 ( 同 商南県)  
河南省南陽府淅川県 (河南省南陽地級市淅川県)

探訪先

太華山 (西岳)

#### 11. 「遊太華山日記〔湖広襄陽府均州〕」

: 天啓癸亥3年(1623)3月11日～4月9日、徐霞客38歳

## 行程

### 3月

- 11日 陸行。河南省南陽府淅川県の石廟湾を出て、湖広省鄖陽府鄖県域に入る。  
襄陽府均州県域に入り、曹家店（今も同名）に泊。
- 12日 域内を南下し、漢水を渡る紅粉渡を渡る。  
均州県域に至り、泊（このあたり、今は丹江口ダムに水没）。
- 13日 太和山に入る。太和山探訪（～15日）。
- 15日 山麓の草店に下りる。  
帰途につく。

### 4月

- 9日 帰宅。  
（遊記ここまで）

### 〈補注〉

- 3月15日に太和山を下り、4月9日に家に帰るまでの、24日間の行程は不明。  
丁文江年譜は、漢水と長江を下ったのではないかとする。

### 経由地

- 河南省南陽府淅川県（河南省南陽地級市淅川県）  
湖広省鄖陽府鄖県（湖北省十堰地級市鄖県）  
同 襄陽府均州県（湖北省 同 丹江口市）

### 探訪先

- 太和山（玄岳、武当山）

## 12. 「閩遊日記〔前〕」

：崇禎戊辰元年（1628）2月20日～4月5日、徐霞客43歳

### 行程

#### 2月

- 20日 江陰の家から出発。

#### 3月

- 11日 陸行。徒歩か？  
浙江省衢州府江山県に至り、峽口鎮（今も同名）を過ぎて、山坑に泊。
- 12日 仙霞嶺を越え、更に丹楓嶺を越えて、福建省建寧府浦城県域に入る。  
九牧鎮（今も同名）に泊。
- 13日 仙陽鎮（今も同名）で昼食。輿を雇う。  
浦城県域に入り、泊。海岸沿いの泉州・興化府あたりは海賊が出ていると聞き、（九鯉湖行のときに取った閩江を下るルートはやめて、延平県まで船で行って、そこからは上陸して永安県に陸行する道を選ぶ）。
- 14日 舟行。観前村（今も同名）で、停泊。  
近くの金斗山に登る。
- 15日 建陽県域に入り、船中（原文「水磯」。あるいは水吉鎮か？）泊。
- 16日 甌寧県域に入り、建寧府城に至り、泊。

- 17日 太平駅（今も同名）を経て、延平府南平県域に入る。  
大横駅を過ぎ、延平府城に入り、泊。
- 18日 陸行。将楽県の玉華洞を訪ねることとし、荷物は奴に持たせて船でやり、自身は軽装で、  
永安で合流することにする。  
西へ進み、南に折れ、山に入って、三連舗（今の三連堰か？）\*に泊。
- 19日 順昌県域の白沙嶺を越え、順昌県域に入る。  
県城を出て、河沿いに進み、杜源を通り、将楽県域に入る。  
高灘舗（今の高唐鎮か？）を経て、山澗渡（今の三澗渡か？）の村家に泊。
- 20日 山谷を抜けて、将楽県域に入る。  
県城を抜け、東南の玉華洞へ向かう。  
玉華洞を探訪し、山中の明台庵に宿泊。
- 21日 将楽県域に戻り、永安へ出発。泊地不明。
- (22日・23日、遊記なし)
- 24日 （おそらく、汀州府帰化県域を経由）  
延平府永安県域に入り、永安県域に至る。  
奴が未着なので永安で待つ。
- 25日 奴を永安で待つ。奴至る。
- 26日 陸行。  
永安を出る。大泄嶺を越え、永安県域の林田に泊。
- 27日 馬山嶺に至り、漳州府寧洋県域に入る。  
寧洋県城（今の双洋鎮）に入り、泊。
- 28日 治安が悪いとのことで、船が出ず、県城に留まる。
- (29日・30日、遊記記事なし)
- 4月
- 1日 舟行。船が出発し、やがて漳平県域に入る。漳平県域に至り、泊。
- 2日 華封鎮（華安）に向かう船に乗る。  
華封で上陸し、どこかで泊。
- 3日 陸行。しばらくして、溪に至る。そこで泊？
- 4日 輿行して、漳州府龍溪県域に至る。  
叔父の徐日升を訪問するも、南靖に居るとのこと。  
夜行船に乗って、南靖に向かう。
- 5日 漳州府南靖県域に入る。  
(遊記ここまで)

〈補注〉

2月20日に家を出てから、3月11日に江山県に至るまでの行程は不明。

[九鯉湖行のときと同じか。]

経由地

浙江省衢州府江山県（浙江省衢州地級市江山市）

福建省建寧府浦城県（福建省南平地級市浦城県）

同 建陽県（同 建陽市）



同 甌寧県 ( 同 建甌市)  
 同 延平府南平県 ( 同 南平市)  
 同 順昌県 ( 同 順昌県)  
 同 将楽県 ( 同 三明地級市将楽県)  
 [同 汀州府帰化県 ( 同 寧化県)]  
 同 延平府永安県 ( 同 永安市)  
 同 漳州府寧洋県 ( 同 龍岩地級市漳平市)  
 同 漳平県 ( 同 )  
 同 漳州府龍溪県 ( 同 漳州地級市華安県、同 轄区)  
 同 漳州府南靖県 ( 同 南靖県)

探訪先

金斗山、玉華洞

\*この地、遊記には「建寧府甌寧県・延平府南平県・同順昌県の境」というが、甌寧県より、沙県に近い。

### 13. 「閩遊日記〔後〕」

：崇禎庚午3年（1630）7月17日～8月18日、徐霞客45歳

行程

7月

17日 江陰の家から出発。

(18日～20日、遊記なし)

21日 浙江省杭州府城に至る。

(22日～23日、遊記なし)

24日 錢塘江を渡る。

(25日～27日、遊記なし)

28日 衢州府龍遊県城に至り、青湖鎮へ向かう船を雇う。

舟行。少し進み、衢州府城の西安県にある、樟樹潭に泊。

30日 衢州府江山県城を經由し、同県域の青湖で上陸。

陸行。

8月

1日 江郎山を望むも、雨もあって訪ねられず。同県域の宝安橋に泊。

2日 仙霞嶺を登る。浙江省側の二十八都で飯。

福建省建寧府浦城県域に入り、浮蓋山が名勝であると聞き、入る。

浮蓋山探訪（～4日）。山中の寺に泊。雨で2日間寺で過ごす。

(3日、遊記なし)

4日 雨を冒して、山中の龍洞を探訪。

寺で午餐の後、下山。浦城県域の九牧鎮に泊。

5日 舟行。浦城県城へ下る船に乗る。

〔「4日かけて延平府城に至る」とあり、おそらくこの間、舟行だろう。〕

〔建陽県域と甌寧県域を通過しているはず。〕

(6日～9日、遊記なし)

- 10日 延平府南平県城に至る。船を乗り換えて、西溪・沙溪を溯る。  
沙県域に入り、同県域の榕溪(今の涌溪)に泊。
- 11日 沙溪を溯り、沙県の旧城に泊。
- 12日 沙溪を溯り、沙県域の洋口(今の三明市洋口仔)に泊。
- 13日 沙溪を溯り、沙県域の双口(今の三明市莘口镇)を經由する。  
永安県域に入ると、新凌鋪。(ここで泊?)
- 14日 沙溪を溯り、永安県域の鞏川(今の永安市貢川鎮か?)を經由。  
桃源澗で下船。付近を探訪。一線天、環玉洞などあり。今桃源洞という。  
夜船を出し、永安県域の少し手前で泊。
- 15日 陸行。鷄鳴橋を越え、永安県域の林田に泊。
- 16日 漳州府寧洋県域に入り、寧洋県域に至り、泊。
- 17日 舟行。漳平県域に入り、華封鎮に至り、泊。
- 18日 途中の峽中の最難所で上陸して散策。  
「明日は、漳州府城に行き、叔父の徐日升を訪ねよう」の語で結ぶ。

(遊記ここまで)

〈補注〉

7月17日に家を出てから、30日に江山県の青湖鎮で上陸するまでの、行程や移動手段は不明。  
[青湖鎮で、「舟を捨てて陸に登る」とあるから、それまでは舟行だったはず。少なくとも、龍遊からは舟行。あるいは、24日の「錢塘江を渡る」は、その後船に乗り、ついで錢塘江を溯ってきたのかもしれない。龍遊から衢州府城へ至るのは、浙遊日記と同じ。しかしその折りは、常山溪を溯って常山県を經由して江西省に入っているが、今回は、江山江を遡って江山県經由で福建省に入る。]

經由地

浙江省杭州府

同 衢州府龍遊県(浙江省衢州地級市龍遊県)

同 西安県(同 轄区)

同 江山県(同 江山市)

福建省南平府浦城県(福建省南平地級市浦城県)

[同 建陽県(同 建陽市)]

[同 甌寧県(同 建甌市)]

同 延平府南平県(同 南平市)

同 沙県(同 三明地級市沙県)

同 永安県(同 永安県)

同 漳州府寧洋県(同 龍岩地級市漳平市)

同 漳平県(同 )

探訪先

浮蓋山(蓋仙山)・龍洞、永安桃源洞、九龍江沿いの難所

#### 14. 「遊天台山日記〔後〕」

：崇禎壬申5年（1632）3月14日～4月18日、徐霞客47歳

行程

3月

14日 騎行。浙江省台州府寧海縣城を出る。

同縣域の岔路口に泊。

15日 筋竹嶺で、午餐。天台縣域に入る。

天台山に入る。天台山探訪（～19日）。

（遊記ここで中断）

4月

16日 雁宕山から天台山に戻る。天台山探訪（18日）。

天台山の水系をまとめて論じる。

（遊記ここまで）

〈補注〉

3月14日に、寧海縣へ至るまでの行程は不明。

[3月20日から4月15日まで、遊記が途切れている。4月15日の冒頭が、「自雁宕返」で始まっていることから、その間、雁宕山を訪ねていた事が分かる。]

經由地

浙江省台州府寧海縣（浙江省寧波地級市寧海縣）

同 天台縣（同 天台縣）

探訪先

天台山

#### 15. 「遊雁宕山日記〔後〕」

：崇禎壬申5年（1632）4月28日～5月8日、徐霞客47歳

行程

4月

28日 陸行。浙江省台州府黃巖縣城に入る。

騎行。温州府樂清縣域に入る。同域内の大荆を経て、章家樓に泊。

29日 同縣域の雁宕山に入る。陸行。雁宕山探訪（～5月8日）。

5月

8日 雁宕山を下り、大荆へ向かう。

（遊記ここまで）

經由地

浙江省台州府黃巖縣（浙江省台州地級市轄区）

同 温州府樂清縣（同 温州地級市樂清市）

探訪先

雁宕山（雁蕩山）

## 15. 「遊五台山日記〔山西太原府五台县〕」

：崇禎癸酉6年（1633）7月28日～8月8日、徐霞客48歳

行程

7月

28日 陸行。北直隸京師（北京）を出発。

（29日～8月3日、遊記なし）

8月

4日 真定府阜平県城に至る。同県域の龍泉関に至り、泊。

5日 長城嶺を越え、龍泉上関を通り、山西省太原府五台县域に入る。

五台山に入る。五台山探訪（～8日）。

8日 北台を出て、華巖嶺を經由して、繁峙県域に入る。

同県域の野子場に泊。

（遊記ここまで）

〈補注〉

江陰の家から北京への行程は不明。

7月28日に北京を出て、8月4日に阜平県に至るまでの行程は不明。

經由地

北直隸京師（北京市）

同 真定府阜平県（河北省保定地級市阜平県）

山西省太原府五台县（山西省忻州地級市五台县）

同 繁峙県（同 繁峙県）

探訪先

五台山（清涼山）

## 16. 「遊恒山日記〔山西大同府渾源県〕」

：崇禎癸酉6年（1633）8月9日～11日、徐霞客48歳

行程

8月

9日 陸路。東底山（東山郷）で川と別れて北上。

沙河（滹沱河の上流）を渡り、同県域の朱家坊などを經由。

大同府渾源県域に入る。同県域の土嶺（今も同名）の民家に泊。

10日 同県域を北上し、恒山麓の懸空寺に泊。

11日 恒山探訪。

下山し、懸空寺を経て、渾源県城に至る。

〈補注〉

[8日が始まる前に一文があり、北台が繁峙県との境であることを述べる。]

經由地

山西省太原府繁峙県（山西省忻州地級市繁峙県）

同 大同府渾源県（同 大同地級市渾源県）

探訪先

## 恒山

### 卷二上

#### 「浙遊日記」

：崇禎9年（1638）9月19日～10月16日、徐霞客51歳

#### 行程

##### 9月

- 19日 舟行。江陰の家から出発。  
無錫県域に入り、船中泊
- 20日 無錫県城滞在。
- 21日 無錫県城から出発し、蘇州府常熟県域を經由して、呉県域に入る。  
蘇州府城（呉県・長州県）で、船中泊。蘇州府城滞在（～23日）。
- 23日 蘇州府城から出発し、長州県を經由して、崑山県域に入る。  
崑山県と松江府青浦県との境の青羊江岸に泊。
- 24日 松江府青浦県域を經由して、華亭県域に入る。  
同県域の佘山に陳継儒を訪ねる。そこに泊。
- 25日 佘山から出発。仁山（辰山）、泖湖などを經由。  
一時、蘇州府長州県域の章練塘に入る。  
また華亭県域に戻り、嘉興府嘉善県域の蔣家湾（成家湾）で泊。
- 26日 西塘、王江徑などを經由。  
嘉善県と蘇州府呉江県との境をなす瀾溪を溯る。  
呉江県側の呉店村浜で泊。
- 27日 嘉興府桐郷県域に入り、同県域の烏鎮に至る。  
烏鎮で友人を訪ねるも不在。  
湖州府歸安県域に入り、同県域の連市（練市）を經由。  
徳清県域に入り、同県域の新市を経て、曹村で泊。
- 28日 杭州府仁和県域に入り、同県域の唐棲を經由。  
杭州府城（仁和県・錢塘県）に入り、泊。杭州府城滞在（～10月2日）。  
昭慶寺・呉山・寶石山・飛來峯・靈隱寺等を探訪。

##### 10月

- 2日 陸路。徒歩？杭州府城から出発。  
女兒橋、老人鋪を経て、余杭県域に入る。同県域の倉前を経て、泊。
- 3日 余杭県域に入り、輿を雇う。ここから輿轎行。  
丁橋鋪（丁公村？）を經由し、臨安県域に入る。  
臨安県城を通過し、皇潭（横潭）を經由。  
山道に入り、同県域の全張村で泊。
- 4日 乾塢嶺（甘塢嶺）を經由して、新城県域に入る。  
羅村橋（羅宅村）を經由して、洞山に至り、鍾乳洞を探訪。  
太平橋に至り、泊。
- 5日 顧従の王二が逃亡。



新城県と於潜県との境の、馬嶺を越え、於潜県域に入る。

応渚埠（印渚鎮）のやや北で舟に乗る。

舟行。嚴州府分水県域に入る。桐廬県域に入り、桐廬県城に着き、泊。

6日 富春江を遡上。建徳県域に入る。

県城（嚴州府城）東の東関で上陸し、旅館に泊。

7日 蘭江を遡上。金華府瀾溪県域に入る。蘭溪県城で泊。

8日 西へ遡上する舟運は、勤王の軍隊が通過するため閉鎖。

荷物を宿に預け、金華山の西南を廻って、金華県域に入る。

金華県城外で泊。

9日 羅店を經由して、金華山へ入り、金華山探訪（～11日）。

11日 金華山を蘭溪へ下り、舟を雇い、舟行。すぐ泊。

12日 衢江を西へ遡上。北岸は蘭溪県域で、南岸は金華府湯溪県域。

蘭溪県域の裘家堰（裘家村）を經由して、泊。

13日 衢州府龍遊県域に入り、泊。

14日 県境の安仁を経て、西安県（衢州府城）域に入り、楊村で泊。

15日 樟樹潭・鶏鳴山を経て、西安県城に入る。

西のかた常山溪を遡上。橋の実が実るなかを舟行。

常山県境で泊。

16日 常山県域に入り、常山県城で上陸。

輿轎を雇い、西へ。辛家舗を経て、十五里で泊。

（遊記ここまで）

〈補注〉

[浙遊日記は、自宅を出るところから、途中切れ目なく記事が続く。]

經由地

南直隸常州府江陰県（江蘇省無錫地級市江陰市）

同 無錫県（ 轄区）

[同 蘇州府常熟県（蘇州地級市常熟市）…記事はないが、ここを通過しているはず]

同 呉県（ 轄区）

同 長州県（ 同 ）

同 崑山県（ 崑山市）

同 松江府青浦県（上海特別市）

同 華亭県（ 同 ）

浙江省嘉興府嘉善県（浙江省嘉興地級市嘉善県）

南直隸蘇州府呉江県（蘇州地級市呉江市）

浙江省嘉興府桐郷県（浙江省嘉興地級市嘉善県）

同 湖州府歸安県（ 同 湖州地級市轄区）

同 徳清県（ 同 徳清県）

同 杭州府仁和県（ 同 杭州地級市轄区）

同 錢塘県（ 同 ）

同 余杭県（ 同 ）

同 臨安縣 ( 同 臨安市)  
 同 新城縣 ( 同 富陽市)  
 同 嚴州府分水縣 ( 同 )  
 同 桐廬縣 ( 同 桐廬縣)  
 同 建德縣 ( 同 建德市)  
 同 金華府蘭溪縣 ( 同 金華地級市蘭溪市)  
 同 金華縣 ( 同 轄區)  
 同 湯溪縣 ( 同 )  
 同 衢州府龍遊縣 ( 同 衢州地級市龍遊縣)  
 同 西安縣 ( 同 轄區)  
 同 常山縣 ( 同 常山縣)

探訪先

杭州府城：昭慶寺・吳山・寶石山・飛來峯・靈隱寺等  
 洞山（仙洞山）

金華山：智者寺・鹿田寺・闔鷄巖・赤松宮・金華三洞（朝真洞・冰壺洞・雙龍洞）・講堂洞・洞  
 源寺・六洞山・白雲洞・紫雲洞・水源洞（涌雪洞）・

（了）